第５章　安宅氏城館跡の本質的価値

第１節　安宅氏城館跡の本質的価値

安宅氏城館跡の本質的価値（史跡に値する歴史上、学術上の価値）を以下のとおり整理した。

大規模かつ高密度な城館跡が良好な状態で保存されている

安宅氏城館跡は、ほかの熊野水軍の城館跡と比べ、卓越した規模かつ密集度が高い。また各城館跡では、土塁や堀切等の遺構が良好に遺存している。このように良好な状態で保存されている城館跡は大変貴重である。

水陸双方の交通路との密接な関係を示している

紀伊半島南部は、日本列島の東西を結ぶ海上交通の結節点であった。その中でも安宅氏城館跡は、東海地方、瀬戸内地方、中国大陸といった様々な地域の搬入品の出土状況から、海運を掌握していた勢力の要衝と位置づけられる。また、安宅氏は久木小山氏と協働で山林資源を管理し、木材の搬出には日置川を利用していた。このように水運に恵まれた立地である一方、安宅荘の北辺部には熊野参詣道大辺路が通過しており、陸路の便にも恵まれていた。以上のことから、安宅氏城館跡は水陸双方の交通路との密接な関係を示している貴重な例である。

鎌倉時代から戦国時代までの熊野水軍の活動や領域支配の実態がわかる

応仁の乱以降の紀伊国では、畠山氏をはじめとして宗教勢力（熊野三山等）、室町幕府奉公衆（山本氏・湯河氏等）、在地領主層（安宅氏・久木小山氏・周参見氏等）といった各勢力が、それぞれの利害関係のなか協働と敵対を繰り返し複雑な様相を示していた。その中でも安宅氏は、ほかの熊野水軍との関係を豊富な史料により確認することができる。さらに、城館の配置等により戦国期の領域支配の実態が把握できる貴重な例である。

戦国期における紀伊国の政治情勢をうかがい知ることができる

安宅氏城館跡は、畠山氏の内訌に際して、戦略的に築城していることが確認できる。安宅氏と敵対関係にあった山本氏（富田荘）は、最前線基地として要害山城跡を設け、熊野参詣道大辺路を介した安宅荘の入り口には土井城跡を築いている。その一方、友好関係にあった久木小山氏（三箇荘）との境界には、顕著な城館跡は認められない。このような城館跡の様相は、戦国期に安宅氏が富田荘側からの侵攻を特に警戒していたことを示すとともに、当該期における紀伊半島の政治情勢の一端をうかがい知ることができる稀有な城館群である。

第２節　安宅氏城館跡の構成要素

ここでは、安宅氏城館跡の構成要素を以下のような視点に基づいて、特定した。

（１）構成要素の区分

安宅氏城館跡を構成する要素は、Ⅰ.史跡安宅氏城館跡を構成する要素、Ⅱ.史跡安宅氏城館跡の周辺環境を構成する要素の大きく２つに区分できる。

Ⅰ.史跡安宅氏城館跡を構成する要素は、「A.本質的価値を構成する要素」と、「B.保存活用に資する要素」「C.その他の要素」に大別できる。

Ⅱ.史跡安宅氏城館跡の周辺環境を構成する要素は、追加指定候補の「D.本質的価値に準じる要素」、日置川や熊野参詣道等の「E.本質的価値に関連する要素」、その他を「F.その他周辺環境を構成する要素」に区分した。

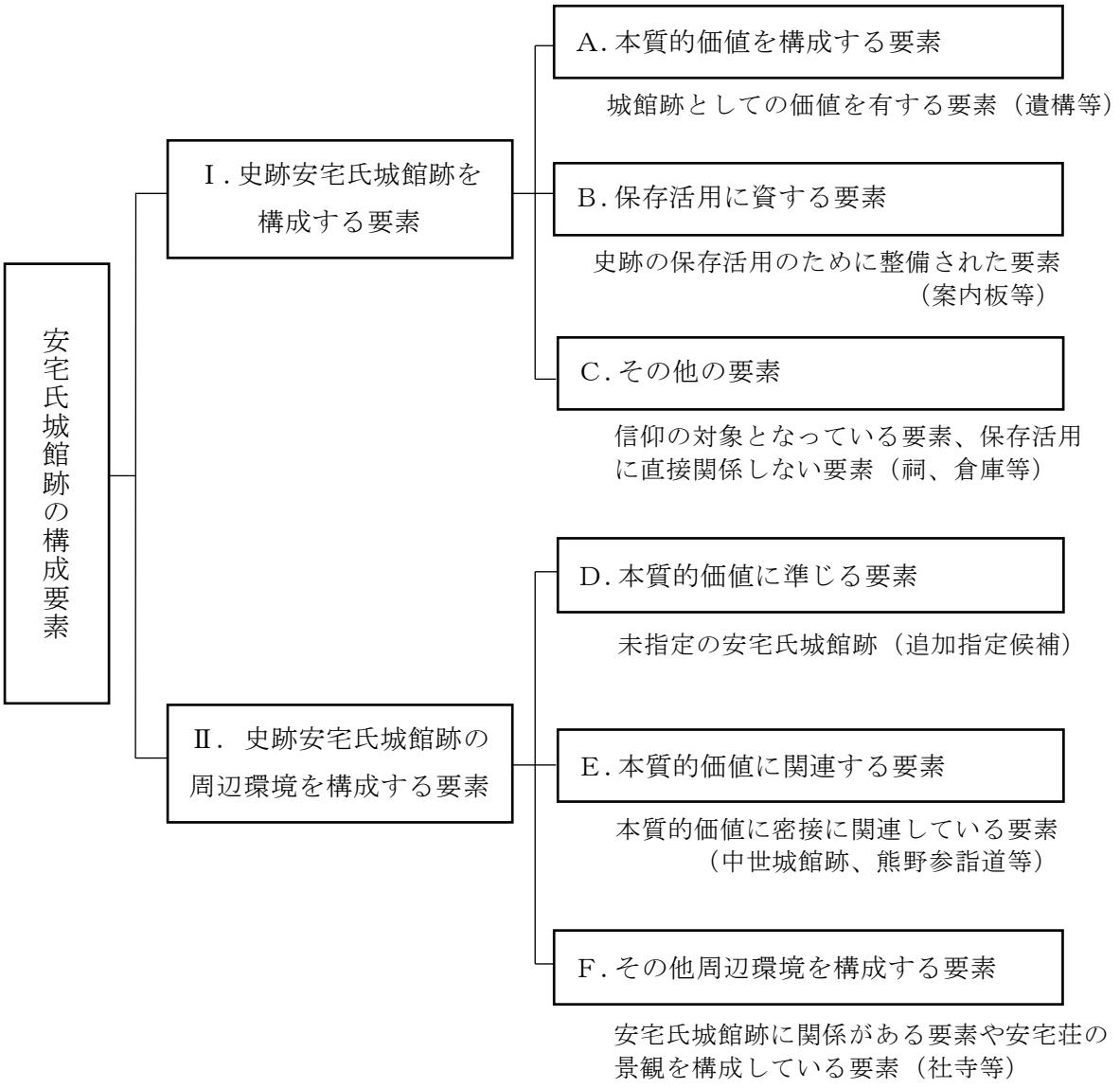

図 5-1 構成要素の区分

Ⅰ. 史跡安宅氏城館跡を構成する要素

１）安宅氏居館跡

分類	内容	
A. 本質的価値を構成する要素	地下遺構等	堀跡、井戸跡、居館内区画溝跡、出土遺物
C. その他の要素	地域住民の居住及び生業に関する要素	宅地等

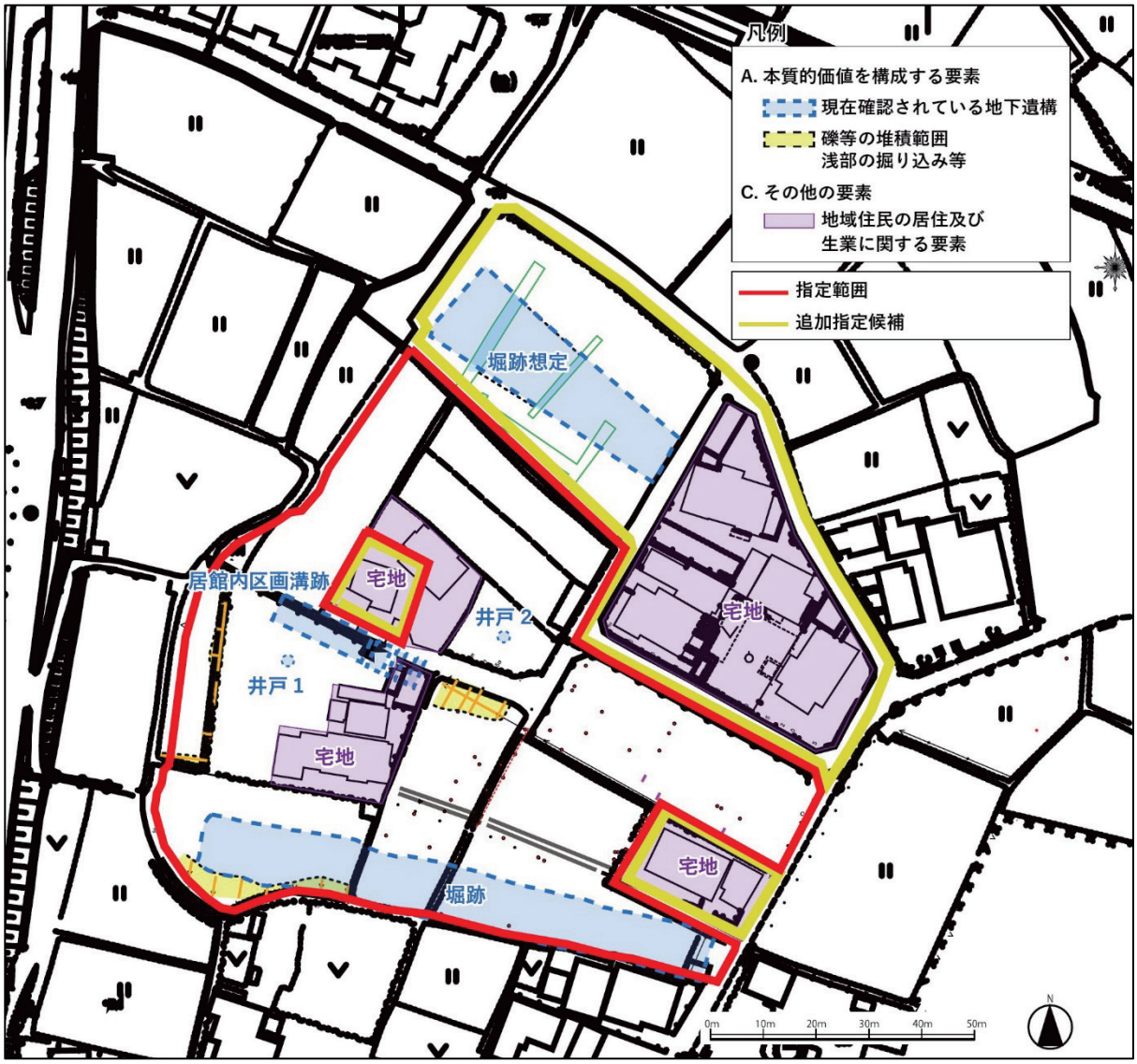

図 5-2 安宅氏居館跡における構成要素

Ａ. 本質的価値を構成する要素

井戸跡

居館内区画溝跡

出土遺物（南伊勢系土師器）

出土遺物（鉛製鉄砲玉）

Ｃ. その他の要素

宅地等

２）八幡山城跡

分類	内容	
A. 本質的価値を構成する要素	地上遺構	曲輪、土塁、堀切、横堀、空堀、竪堀、河原石、切岸、斜面地
	地下遺構等	虎口、土塁内側の石積み、階段、スロープ状の入り口、火災痕跡、出土遺物
B. 保存活用に資する要素	活用のための施設	説明板、誘導板 1. 2、ロープ柵、登山道、階段、杖置き場、安宅氏城館跡の図・写真の展示
C. その他の要素	信仰の対象となっている要素	祠 1～3
	保存活用に直接関係しない要素	倉庫、仮設トイレ（据置）

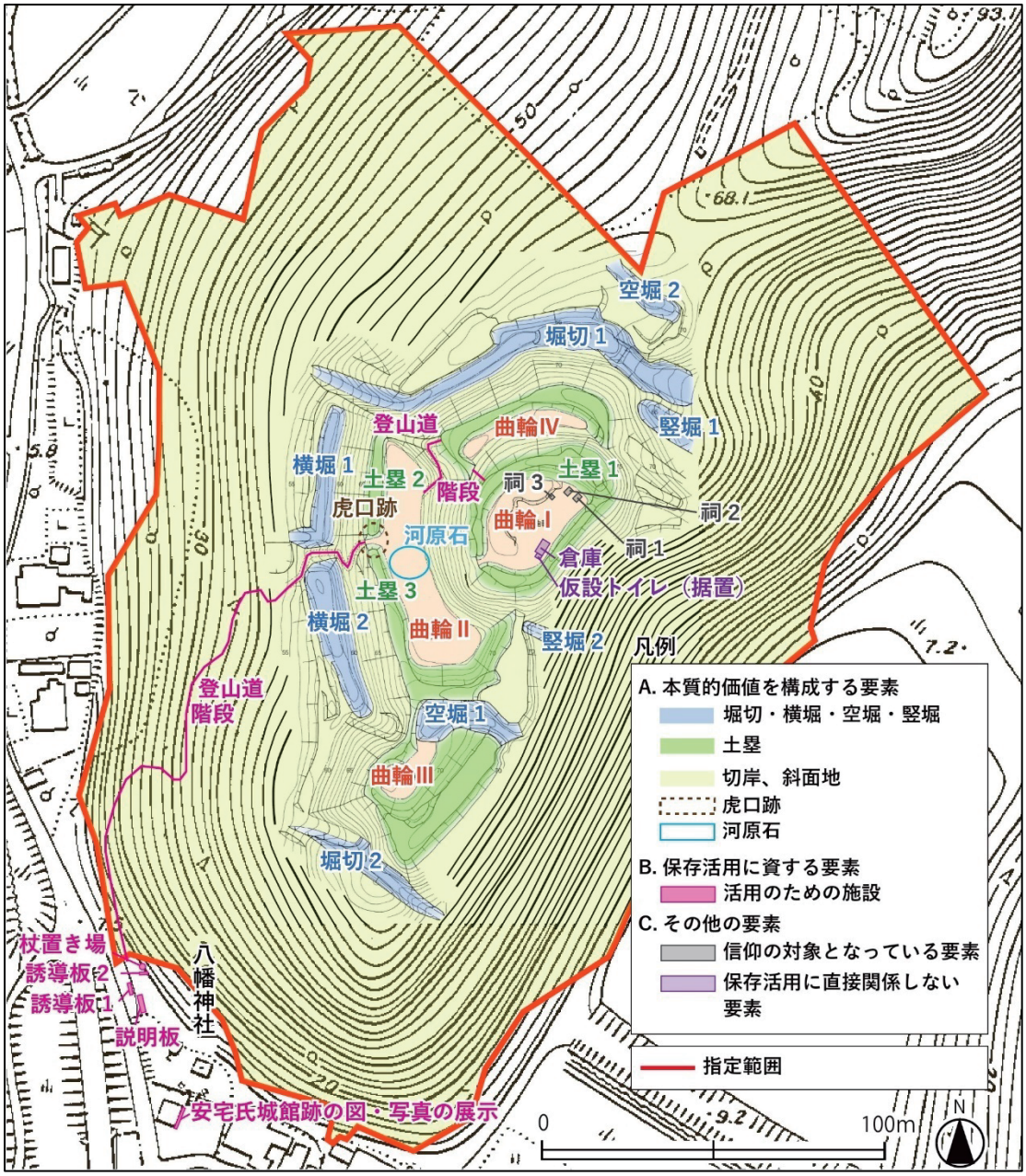

図 5-3 八幡山城跡における構成要素